

## おわりに

まず、ここまで一橋祭研究「『通勤ライナー』と一般列車の共存」をお読みいただいたことに、感謝の意を表します。ありがとうございます。

今年の一橋祭研究はお読みになる方に情報をリアリティをもって伝えられるよう、『通勤ライナー』への乗車体験や混雑度の現地調査などを盛り込みました。しかしながらその代償として客観性が失われたことは否めません。

またボリュームに関しても昨年度から部員が大きく減少したため、昨年度と比較して減少しました。こちらに関しては伝えたいことを簡潔に述べられた、という点ではよかったかと思いますが、物足りないと思われる方もいるでしょう。申し訳ありません。

『通勤ライナー』に関しては、近年多くの鉄道会社で運行がなされるようになり、より多くの乗客に快適な通勤の機会を提供することができるようになりました。少子高齢化が進むなかで、将来的には地方の路線だけでなく、大都市圏の路線についても乗客の減少がみられるようになるでしょう。そういったなかで鉄道会社がどのように収益を確保するか、そしてどのように路線の魅力を高めて乗客を引き付けるかを考えるうえで、『通勤ライナー』の運行というのも1つの手段になることでしょう。ただし新しく『通勤ライナー』の運行を始める際には、一般列車との共存の問題が発生します。こういった問題を考える際に、本研究が少しでも役に立てば幸いです。

最後になりますが、すべての点において至らず、研究に協力して下さった一橋鉄研の皆様には、多くのご迷惑をおかけしました。皆様に最後まで協力していただけたからこそ、このような形で研究誌を完成させ

ることができました。いくら感謝しても足りないとは思いますが、この場をお借りして深い感謝の念を表します。ありがとうございました。

一橋大学鉄道研究会2019年度研究担当